様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２８１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０３６４

研究課題名（和文）若手美術家の熟達過程における動機づけの変化の縦断研究と熟達支援プログラムの開発

研究課題名（英文）the longitudinal study of young artists' motivations in processes of making artworks and development of support programs for young artists

研究代表者
横地　早和子（Yokochi, Sawako）

東京未来大学・こども心理学部・准教授

研究者番号：６０５３４０９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、若手美術家の熟達化の過程について、特に創作活動の変化に及ぼす動機づけの影響、特に他者の影響に焦点を当てて解明し、その知見を踏まえた美術家支援のためのワークショッププログラムを開発することである。その結果、若手美術家は、1. 一般の鑑賞者の評価と評論家などの美術の専門家の評価を区別してとらえていること、2. 制作の確信度には内発性と技術が影響していることが明らかとなった。また、縦断調査については作品アイデアの生成がどのようなきっかけで生まれるのかを中心に分析を進めている。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to investigate how young artists expertise their making artworks, paying special attention to their motivation and influences of others in their artistic creations. Based on the results of this study, I planned a workshop program to support young artists' expertise. The results of this research revealed that 1. most of the young artists seemed to distinguish between evaluations from public viewers and expert in art-field, such as art critics, 2. the confidence in making artworks was influenced by internal motivation and their own reliable techniques. Additionally, I am analyzing the longitudinal study of young artists' processes of generating artistic ideas.

研究分野：認知心理学

キーワード：創造活動　芸術的創造　創造的熟達　創造の動機づけ

１．研究開始当初の背景

芸術は、文化的な豊かさを象徴するものである。例えば、各国の有名美術館（ルーブル美術館など）には、名画を見ようと世界中から膨大な観光客が集まる。現代の美術においても同様であり、パリのポンピドゥー・センター、ロンドンのテート・モダン、ニューヨーク MoMA など、現代美術を扱う美術館の人気の高さは、国の文化的な強さを示しているともいえる。日本の現代美術や漫画なども“Cool Japan”とよばれ、海外で人気を博している。

しかし、そうした美術を担う若手は、経済的な問題や創作活動の行き詰まりなどの困難に直面しやすく、それによって美術家を諦めてしまう。こうした問題を打開するためにも、若手美術家を支援する社会的な制度を整える必要があり、また学問領域としてもこれまで熟達の問題を扱ってきた認知や学習の心理学研究の知見に基づいた、熟達のための支援プログラムが必要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、若手美術家（芸術大学の大学院生等）の熟達化の過程について、特に創作活動の変化に及ぼす動機づけの影響（特に他者の影響）に焦点を当てて解明し、その知見を踏まえた美術家支援のためのワークショップ・プログラムを開発することである。

創造活動は本質的に外界から何らかの触発をうけて営まれる活動であり（岡田、2013）、他者や他者の生成物が個人の創作活動を活性化させ、その連鎖が文化や生活を豊かなものにしていく。美術においてそれは顕著であり、本研究は、特に若手美術家の熟達過程における他者の影響に焦点を当てるものである。

(1) 美術家の熟達化の過程に関する先行研究

熟達化の研究は、チェスや算盤の熟達者と初心者の比較などから、熟達者が有する技能の高さや豊富な知識とその構造について研究が行われてきた（波多野・稲垣、1983 など）。特にどのように熟達するのかという熟達化の過程については、芸術の領域（音楽（大浦、2000）や演劇（安藤、2005）など）も少しずつ解明されている。中でも、美術における熟達化の過程についての研究からは、熟達の過程で 20 代から 50 代にかけて大きく 3 つのフェイズ（「1.外的基準への囚われ」「2.内的基準の形成」「3.創作ビジョンに基づいた活動」）に分けられることが示されている（横地・岡田、2007; 2012）。

特に熟達の初期においては、美術家として活動を継続するための知識や技術の獲得が欠かせないため、大学・大学院等で学習したことや教員・他の学生からの評価を参照しながら熟達の歩を進めていく。しかしながら、こうして卒業した若手美術家の多くは、現実社会の中で創作に関わる様々な困難（制作や発表の場の確保、経済的問題など）に直面し、美術家を諦めてしまう。実際に、芸術系大学を卒業した者が美術家として活躍できるのは、よくて 1 学年に 1 人、通常は数年に 1 人であり、20 代、30 代と年を経る毎にその数はどんどん減少するという極めて厳しい現実がある（横地・岡田、2012 等）。そのため、熟達の初期に直面する問題をどのように乗り越え、いかに創作活動に対する動機づけを維持するのかも重要な問題となってくる。

(2) 熟達化の過程における動機づけについての先行研究

これまでの動機づけ研究は主に教科教育などの学習場面におけるそれを扱っており（速水、1998 等）、大人のワーク・モチベーションの研究も高い関心を持って研究が進められている（金井、2006 等）。しかし、熟達途上や熟達した者たちの動機づけについては明らかではない。

一般的には、その道のプロになった熟達者たちは、当該領域に対する内発的に高い動機づけを有しており、自律的に熟達の過程をすすんできたように考えられている。ところが、プロのスポーツ選手が「他者の期待に応える」動機によって最高のパフォーマンスを上げるという、従来の動機づけの考え方とは相反するような他律的な動機づけが促進的に機能するケースも見られる。

このように、他者との関係や外界からの刺激を一律に他律的動機として否定的に扱うことは適切ではなく、「他者の期待に応える」動機とは「自分のため」と「他者のため」の両者を統合させながら行動を遂行することであると考えられている（伊藤、2004）。ところが、「他者の期待に応えるための行動は、ある程度自己決定的に行われるという点で外発的ではないが、他者を喜ばせるための道具的行動と考えられる点で内発的でもなく、内在化の程度が不十分なためエージェンシーを十分に感じることができない、中間的な段階にあると考えられる（伊藤、2004、p78）」とも見なすことができる。

こうした動機づけの中間的な状態は、特に若手の芸術家にも見られる特徴である。横地・岡田（2013）は、若手と熟達した音楽家や美術家を対象に創造・表現活動に対する動機づけを検討し、若手ほど「他者の評価」を気にし、「表現に対する確信度（自己効力感に相当）」も低いことを示している。こうした結果からも、熟達の初期段階における動機づけは十分に自律的であるわけではなく、彼らが学習の途上にいるという要素も鑑みても、まだ他律的な影響があると考えられる。したがって、若手美術家が抱いている動機づけの傾向や動機づけスタイル、他者からの影響等が彼らの創作活動に影響を及ぼしていることが予想され、熟達化の過程の中で動機づけが徐々に自律的なものに変化する可能性があると考えられる。

こうした知見を踏まえると、美術家としての熟達の初期段階は、１）創作活動に対する

動機づけは他律性と自律性が拮抗する中間的状態にあり、２）十分な自律性を感じられないことや他者からの適切な評価を受ける機会が少ないことで引き起こされる自己効力感の低さが創作活動の行き詰まりを生じさせると考えられる。

芸術家の熟達過程と動機づけの関連を解明すると同時に、若手美術家が自律的な動機づけによって創作活動に取り組めるような仕組みについても有益な示唆を得る必要がある。そこで本研究では、熟達に必要な要素の理解と支援のサイクルという考えに基づいて研究活動を進めることとし、芸術系大学で学ぶ大学生らを研究協力者に募り、若手美術家の熟達過程について４年間の縦断研究を実施し、１）創作活動における動機づけ、２）他者を意識した創作活動の変化の解明を目指す。そして、そこから得られた知見に基づき、３）若手美術家支援のためのワークショップ・プログラムの開発を目指す。

３．研究の方法

(1) 質問紙調査

実施：2014 年-2017 年

研究協力者：東京・愛知・京都などの芸術系大学に通う学生・院生（223 名、平均 25.5 歳）

手続き：創作活動に対する動機づけの解明を目的とした質問紙を用意し、調査をおこなった。調査は授業の時間を利用して、一斉におこなった。

質問紙内容：横地・岡田（2007;2013）で使用した創作活動における動機・価値観尺度を利用した。項目は、創造・表現活動に対する動機や価値観に関する質問からなっており、芸術活動に関する動機づけについては先行研究がないため、独自に作成した項目である。作成に際しては、創造・表現活動の動機や価値観をできるだけ多側面から測定できるように、「自己表現（e. g., 自分の内面を表現したい）」「社会的評価（e. g., 専門家に認められたい）」「美の追究（e. g., 完成度の高い表現をしたい）」など 13 の側面（各 4 項目）を設定し、加えて「創造・表現活動への動機」と自身の表現活動に対する「確信度（11 項目）」を 5 件法でたずねることとした。

(2) 縦断調査

実施期間：2014 年 10 月–2016 年 3 月

研究協力者：美術系大学で学ぶ大学生（女性 7 名，男性 3 名いずれも 20 代前半）

手続き：月に 1 度の面接による縦断調査を実施した。1 回の面接時間は約 20-30 分であり、記録は IC レコーダーとビデオ録画を用いた。主な記録対象は、制作した作品、それにまつわるメモやスケッチ、アイデアブックなどであり、分析のための補足資料として複写の許可を得ながら収集した。また、各協力者には日常生活の中で気になること、思いついたアイデア、取り組んでいる作品の制作過程などの記録を撮ってもらった。記録用に iPod を貸出、写真アプリを用いて写真を撮ると共に、その被写体について現在考えていることやそのときの感情などもメモで残してもらうように依頼した。

調査事項：縦断研究における主な調査事項は次の通りであった。①創作活動における他者の影響による動機づけ変化、②創作活動における他者の影響の時期と評価基準、③他者の影響による創作活動の阻害経験や促進経験、④作品表現やコンセプトの変化とその影響要因

(3) ワークショップ

実施期間：2017 年 1 月 2 月

参加者：3.2 の研究対象者の中から希望者に対して、若手美術家支援のためのワークショップ・プログラムの素案を準備し実施を試みた。協力を依頼したのは、大学院を修了後 10 年程度経過した若手の先輩芸術家らである。これは、これまでの美術のワークショップ講師は、熟達した美術家がつとめているため、どうしても教育的・学習的側面が強調されやすかったのに対して、若い芸術家の創作活動に刺激を与え、動機づけを高めるような人物がふさわしいと考えた為である。大学や大学院卒業後に、独自に美術の世界にこぎ出す上で、どのようにコネクションを形成したり、作品の説明の方法にどのような工夫を加えたりするのかと言った、具体的な話を聞くと共にアドバイスを受ける機会となるようにした。

４．研究成果

(1) 質問紙調査の結果について

創造・表現活動の動機と確信度の項目構造を検討するために因子分析（最小二乗法および最尤法、promax 回転）を行ったところ、動機尺度から 6 因子が、確信度尺度から 2 因子が抽出された。前者は、第 1 因子：「独自性・斬新性重視（8 項目、α= .791）」、第 2 因子「専門家評価（6 項目、α= .829）」、第 3 因子「社会的成功（8 項目、α= .773）」、第 4 因子「内発性（8 項目、α= .769）」、第 5 因子「技術・完成度重視（5 項目、α= .653）」、第 6 因子「伝統・普遍性重視（5 項目、α= .678）」と命名した。後者は、「確信度（7 項目、α= .840）」「衝動性（5 項目、α= .634）」と命名した（表 1、2 参照）。

創造・表現活動の動機項目については、当初 9 つの下位カテゴリを設定して質問を作成したが、分析の結果 6 つの因子に収束していた。特に「○○からの評価」といった学芸員や芸術の仲間、師匠らからの評価は 1 つの因子として抽出された。反対に、一般の鑑賞者やマスメディアに取り上げられると言った評価については、専門からの評価とは独立した形で抽出されたことから、専門家らからの評価と一般の鑑賞者らからの評価は、芸術家にとっては別のものとして見なしている可能性があることが示唆される。特に、一般の

鑑賞者に認められることやメディアに取り上げられることが１つの因子としてまとまっており、メディアや一般的な評価の高さというものを社会的な成功を反映する要素としてとらえている可能性があることが分かった。

ところで、動機づけの観点から内発的な動機に関する因子とそれ以外の因子との相関を見てみると、「内発性」因子は、「独自性・個性重視」因子との間に r = .424 の中程度の相関が見られた。反対に、「専門家評価」因子とは r = .266、「社会的成功」因子とは r = .179 と弱い相関もしくはほとんど相関が見られない結果となっており、内発的な動機に関しては、独自性や個性を重視した制作との間には関連性が見られるものの、他者からの評価や社会的な成功はほとんど関連性がないことがうかがえる。

なお、創作に対する「確信度」因子に対して、他の因子がどの程度貢献しているのかを調べるために重回帰分析をおこなった。その結果、「技術・完成度重視」因子と「内発性」因子の標準偏回帰係数が有意であった（それぞれ、β = .193, p = .009; β = .175, p = .016）。このことから、「確信度」には、「技術・完成度重視」因子と「内発性」因子が少なからず影響を及ぼしていることがうかがえる。一方、「専門家評価」因子と「社会的成功」因子からは影響が見られず（それぞれ、β = -.084, *n.s.*; β = .113, *n.s.*）、確信度に対しては他者の評価は寄与が小さいことがうかがえる。ただし、今回得られた結果はモデルの適合度が低い（R^2 = .075）ため、解釈は慎重におこなう必要がある。

表１　因子分析の結果（動機・価値観尺度）

表1　因子分析の結果表（動機・価値観尺度）最小二乗法・promax回転（n=223）

項目	因子 1	2	3	4	5	6	共通性
1．独自性・新新性重視（α=.791）							
MM42_どこにもない新しい芸術活動をしたい	**.863**	-.007	-.082	-.031	-.139	-.083	.613
MM8_芸術に新しさを求めている	**.737**	-.054	-.047	-.040	-.106	-.050	.434
MM39_技術的な新しさを目指したい	**.591**	-.052	.015	-.132	.256	.161	.541
MM2_ほかの芸術家とは違う芸術表現をしたい	**.561**	.095	.043	.030	-.148	-.007	.349
MM33_コンセプトやアイデアの新しさを大切にする	**.390**	.182	-.016	.002	.058	-.124	.242
MM43_ほかの人よりも優れた芸術表現をすることを目指している	**.389**	.024	.260	-.081	.127	.025	.361
MM20_自分だけの一貫した芸術表現をしたい	**.383**	.076	-.027	.307	-.048	-.036	.350
MM19_ほかの芸術家に負けたくない	**.364**	-.056	.360	-.042	.100	.109	.415
2．専門家評価（α=.829）							
MM9_自分の先生や師匠（尊敬している指導者）に高く評価されたい	.125	**.711**	-.159	.081	.088	.072	.618
MM38_指導者に、自分の芸術活動がどのように受け止められるかが気になる	-.111	**.648**	.163	-.020	-.123	.153	.461
MM10_同じ芸術の仲間や同輩に高く評価されたい	.023	**.630**	.035	.127	.176	-.083	.581
MM22_自分の先生や師匠（尊敬している指導者）に認められることを目指している	.111	**.627**	-.111	-.080	.016	.241	.490
MM15_同じ芸術の仲間や同輩に認められることを目指している	.044	**.572**	.006	-.046	.229	.067	.502
MM34_同じ芸術の仲間や同輩に、自分の芸術活動がどのように受け止められるかが気になる	-.044	**.539**	.220	-.030	-.138	-.128	.438
3．社会的成功（α=.773）							
MM36_売れっ子の芸術家になりたい	.176	-.019	**.632**	-.036	.027	.067	.524
MM18_評論家やマスメディアに取り上げられたい	.173	-.031	**.615**	.098	-.086	-.072	.468
MM29_一般の鑑賞者に認められることを目指している	-.230	.107	**.592**	.000	.066	-.043	.372
MM30_芸術家として経済的に成功したい	.151	-.228	**.557**	-.002	.090	.107	.401
MM24_一般の鑑賞者に、自分の芸術活動がどのように受け止められるかが気になる	-.234	.212	**.524**	.115	-.115	-.087	.335
MM27_評論家に認められる作品をつくることを目指している	.059	.279	**.388**	-.224	.043	.089	.363
MM5_一般の鑑賞者に高く評価されたい	-.044	.158	**.374**	-.035	.259	-.250	.344
MM22_評論家にどのように受け止められるかが気になる	-.006	.348	**.349**	-.062	-.223	.025	.259
4．内発性（α=.769）							
MM17_自分の気持ちや想いを何よりも大切にしている	-.059	-.043	.076	**.801**	-.044	.063	.610
MM28_自分らしさを追求することは重要だ	.098	.027	.080	**.596**	-.007	.001	.456
MM1_自分の表現したいことを第一に考える	-.139	-.046	.062	**.550**	.053	-.102	.272
MM40_個性を発揮した自分らしい表現をしたい	.331	.080	.030	**.549**	-.056	-.037	.608
MM11_re_芸術活動では自分の内面を表す必要はない（必要がある）	-.082	-.122	-.064	**.540**	-.060	.199	.276
MM7_自分の内面にぴったりする芸術表現をしたい	-.014	.143	-.194	**.537**	.103	.033	.337
MM4_個性的な表現がおのずと表れるようにしたい	.297	.043	.040	**.334**	-.036	-.119	.311
MM35_芸術的な美しさを大切にしている	-.007	-.112	.186	**.253**	.193	.165	.204
5．技術・完成度重視（α=.653）							
MM12_すばらしい芸術表現をするためには、優れた技術が必要である	-.102	.012	-.070	-.006	**.729**	.003	.466
MM14_表現意図を適切に表すための技術を重視する	-.205	.103	-.009	-.043	**.619**	-.064	.350
MM16_優れた技術を身につけたい	.009	-.002	.038	.067	**.617**	-.101	.379
MM26_完成度の高い芸術表現をしたい	.005	-.057	.150	-.073	**.338**	.041	.176
MM41_自分の持っている技術を駆使した芸術表現をしたい	.238	-.015	-.065	.150	**.319**	.029	.247
6．伝統・普遍性重視（α=.678）							
MM31_伝統を守って芸術活動を行いたい	.017	.071	.007	.026	-.049	**.732**	.535
MM3_師匠や先達の考えを実現したい	.050	.257	-.070	-.022	-.135	**.591**	.395
MM32_re_伝統にとらわれたくない（伝統遵守）	-.226	-.066	-.037	-.024	-.012	**.563**	.340
MM13_創始者の想いを伝えていきたい	.004	.098	-.032	.064	.039	**.469**	.262
MM25_普遍的な美を有する芸術表現を目指したい	-.229	.010	.294	.164	.104	**.380**	.286
因子寄与	4.982	4.551	4.420	3.712	3.524	2.354	
累積寄与率（%）	18.02	25.97	32.18	37.47	42.04	46.02	

表２　因子分析の結果（確信度尺度）

表2　因子分析の結果（確信度尺度）最尤法・promax回転（n=223）

	因子 1	2	共通性
1．確信度（α=.840）			
SC9_確信を持って自分の表現活動を進められる	**.787**	.116	.695
SC8_今の表現活動に自信を持っている	**.740**	.224	.712
SC4_re_今の自分の表現に確信が持てずにいる（確信がある）	**.697**	-.171	.433
SC1_自分の表現したいことやそれを実現させる方法がわかっている	**.696**	-.145	.436
SC10_今の自分がしている芸術表現が一番しっくりしている	**.659**	.048	.458
SC14_自分の表現活動の基盤となるコンセプトがある	**.554**	-.131	.274
SC2_芸術活動に積極的に取り組めている	**.381**	.331	.341
2．衝動性（α=.634）			
SC7_芸術表現そのものが楽しくて仕方がない	.091	**.645**	.464
SC3_自分自身の喜びのために芸術活動をしている	-.008	**.560**	.310
SC6_芸術活動や芸術表現は、自分にとっては自然な営みである	.026	**.557**	.321
SC11_感覚的に表現することの方が多い	-.172	**.490**	.212
SC12_訳もわからずに衝動的に表現している	-.424	**.468**	.262
因子間相関			.345
因子寄与	3.385	2.064	
累積寄与率（%）	29.20	44.34	

(2) 縦断調査の結果について

約 3 年間に渡る縦断研究を実施し、現在分析の最中であるため結果の詳細は控えるが、おおよその次の通りの傾向が見られている。

まず、大学で制作を始めたごく初期は、大学の授業で課される課題の制作に多くの時間を割いており、その傍らで自分の制作をお

こなっていること、専攻とする表現領域ごとに課題の取組における制約が異なっており、自由なアイデアが認められる場合とモチーフや題材が固定される場合があること、そのため、制約が大きい表現領域の場合、表現の探索範囲が狭いことといった傾向が見られる。

一方、独自に作品制作を進める際には、絵画作品を彫刻作品で表現してみたり、彫刻作品を絵画作品で表現してみたりといった、他者の作品を自分の表現に引き込んだ「置き換え」がおこなわれる時期があること、その一方で、そうした表現は次の新しい作品表現にはつながりにくいといった傾向が見られた。

また、他者からのアドバイスや支援といったものは、具体的な制作手段の相談であっても部分的にしか得られず、基本的には自分自身で方法を工夫したり、試行錯誤で制作をおこなったりしていることが分かった。美術作品の制作が、基本的には新たな表現方法の創造になりつつある現在、アカデミックな方法を学びつつ、ユニークな素材や方法を見つけ出す為の試行錯誤の時間も必要であり、美術系大学における実技教育に対する学生からの多様な要求も垣間見ることができた。

その意味では、若手芸術家の支援においては、個々の作家が直面している問題について、個別的に対応する必要があると考えられる。したがって、創作にともなう技術的な問題解決の支援にとどまらず、継続的に創作活動に寄り添いながら創作の方向性や大きなコンセプトを考え言葉にする過程で相談に乗ることができる信頼できる他者など、支援ワークショップの要素として組み入れる方法を工夫する必要があるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①髙木紀久子・河瀬彰宏・横地早和子・岡田猛（2015）現代美術家の作品コンセプト生成過程に関するケーススタディ-インタビューデータの計量的分析に基づいて．認知科学、22(2)、235-253.（査読有）

〔学会発表〕（計　５件）

①Yokochi, S., & Okada, T. (2018). The processes of young and expert artists' art making: A qualitative analysis of their creative modification in making artworks. Creativity Conference 2018, Southern Oregon Uni. August 3-6, 2018

②横地早和子・岡田猛（2018）若手美術家の創作過程の検討：美術創作における「ずらし」に着目した分析．日本認知科学会第 35 回大会（ポスター発表）．立命館大学．9 月．（査読有）

③Yokochi, S., & Okada, T. (2016). The processes of young artists' art making: A qualitative analysis of their analogical modification in making artworks. Tokyo International Symposium 2016, Art learning & creativity: Contemporary issues in formal and informal settings.

④ Yokochi, S., & Okada, T. (2015). Creative Motivations and Confidence in the Arts. International Convention of Psychological Science 2015, Amsterdam, the Netherlands.

⑤髙木紀久子・河瀬彰宏・岡田猛・横地早和子(2014)現代美術家の作品コンセプト生成過程に関するケーススタディ-インタビューデータの計量的分析に基づいて．日本認知科学会第 31 回大会、p 168-177（口頭発表）．名古屋大学．9 月．（査読有）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
横地　早和子（YOKOCHI, Sawako）
東京未来大学・こども心理学部・准教授
研究者番号：60534097

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
なし（　　）